

荷ほどきもしてない殺風景なワンルーム、餡色のフロアリングに寝転がって清潔な天井を見詰める。

「う〜ん、そろそろ働くかあ」

大きく伸びをして起き上がる。

203号室に引つ越してきてまずやるのは、フロアリングの四隅に塩を盛る事。

「やべ、塩切れてる…：味の素でいいか？」

コンビニまでひとつ走りする手もあったが、今からでかけるのも面倒くさい。

「まあいつか、似たようなもんだし」

盛り塩を味の素で代用するのも非常識だが、フロアリングの四隅の小皿に味の素の小山ができてるのは尚更シユールだ。

手元のスマホが鳴る。不動産屋からだ。一面ガラス張りのドアを開け、ベランダに出たらボタンを押す。

「もしもし」

『今日入居ですよね、お変わりありませんか。本当は付き添いたかったんですけど』

「滅相もない、そこまでしてもらったらかえって悪いです。

慣れてるので大丈夫ですよ、10件目だし」

『10件ですか。プロですねえ』

「居心地いいと仕事忘れて長居しちゃうんですよ、はは」

『何もありませんでした？』

「ベランダのドア錠が勝手に回って開いたり深夜に誰かがピンポンダツシユしたり外付けの郵便受けをちやがちややる位ですかね」

『怖いじゃないですか』

「ほっときや問題ありません、スルー力検定です。生の泥棒がピッキングしてる方が怖いですよ盗るもんなんもねーのに。担当の不動産屋に聞いたら、業者を装った押し込み強盗があつた部屋なんですよ。だからかーつて納得しました。あ、ベランダの錠が勝手に回るのは別件で、押し込み強盗の次の入居者が取っ手にロープかけて自殺したんですけど」

『怖いじゃないですか!!』

「洗濯物干してる時に閉め出されるのは参りました、おーいって必死に叩いてたら開けてくれたけど」

ドン引きする相手を和ませようとさりさなる沈黙。

『…ええと、不具合はございませんか。お風呂のお湯がないとか靴箱の戸が閉まらないとか』

「なーんも」

『よかったです。では後の事はよろしくお願い致します』

相手が早く電話を切ったがっているのがわかる。俺の事を変人から変態に格上げ、もとい格下げしたのか。

仕方ない、誤解されるのは慣れている。

電話を切って室内に戻り、異変に気付く。

フロアリングの四隅に置いた味の素の小山が崩れる。と  
いうか、減ってる。

「目の錯覚？」

一隅の小皿の前にしゃがみこみ、人さし指ですくつてなめてみる。

「あつ」

そして気付く。

ただ減ってるだけじゃない、零れた味の素がフロアリングに字を浮き彫っているじゃないか。

「初日から怪現象に遭遇なんて二重にツイてんじゃん」

スマホをカメラモードにし、味の素を塗って書かれた『よろしく』を一枚撮っておいた。

味の素の洗礼を終え、幽霊との奇妙な二人暮らしが始まった。

「ただいまー」

事故物件クリナーの傍ら、俺はコンビニでバイトしている。

廃棄処分になった弁当をビニール袋に入れて持ち帰り、玄関で靴を脱ぐ。

もちろんワンルームには誰もいない。「ただいま」はただの反射、実家にいた頃の癖がぬけないのだ。

冷蔵庫をあさってよく冷えた缶ビールを取り出す。ローテーブルの前にどつかと胡坐をかき、レンジでチンしたコンビニ弁当を割箸でかっこむ。

入居から一週間、初日の味の素事件を除いて霊現象は起きてない。

幽霊、どっかいつちまったのかな……それならそれでかまわない、一人で贅沢に脚を伸ばせる。

愛用のノーパソを開き、好きな配信者のゲーム実況を見ていた時だ。

「ははっ、だっせー」

トークに笑っていると急に動画が切り替わり、都内の動物園で日干しされてるパンダの赤ちゃんが映し出される。

「えっ」

なんもいじってねーのに。

「ちよ、いとこなのに」

慌ててマウスをクリック、元の動画を開く。実況が再開するも、またしてもパンダの赤ちゃん動画を切り替わる。なんだ一体、この部屋にや俺しかいないはず……

いや、いた。

「ちよつと!! 俺が観てるんですけど!!?」

苛立つてマウスを連打、フルボリユームフルスクリーンで  
動画を表示。

勝った。

溜飲をさげてそっくり返れば次の瞬間画面が暗転、パソコンの電源が落ちちまった。

「……そんなに赤ちゃんパンダの五目並べ見てえのかよ、いや色合い的にオセロだけど！ 人のパソコンぶんどつてもふもふに癒し求めんじやねーよ厚かましい、挙句逆ギレで電源落とすとかさあ〜」

部屋のどこにいるかもわからない霊相手に盛大に嘆いて愚痴り、腹立ち紛れに缶ビールのプルトップを引く。

「やってらんね……ッぶ!？」

缶ビールの中身が直撃、顔がびしょ濡れになる。なんで？  
どうして？ 気圧の関係？

「犯人はお前か!!」